

「引揚げ文学」に耳を傾ける¹⁾

朴 裕河

1. 忘れられた「引揚げ文学」

日本の敗戦後、中国大陸や朝鮮ほかからいわゆる「引揚げ」をしてきた人の数は650万人に及ぶという²⁾。その半分は軍人たちで、残り半分が民間人であった。そのうち旧「満洲國」を含む中国地域から100万人、朝鮮からおよそ70万人が引揚げている³⁾。この数は、短期間に共通の体験をした人々の数としては膨大なものと言えるだろう。

しかし、戦後の日本社会において「引揚げ」のことが十分に注目されてきた形跡はあまりない。むしろ、すでに成田龍一が指摘しているように⁴⁾、ベスト・セラーになった藤原ていの自伝的エッセイ『流れる星は生きている』（日比谷出版社、1949）をはじめ、引揚げ体験は手記の形式を借りて数多く書かれ、何度かは注目されてきた。

しかし、その体験の重大さに比べて、「引揚げ」や「引揚げ物語」に関する日本の戦後の思想・学界における注目度は、「終戦」や「原爆」などに比べると明らかに低い。『流れる星は生きている』や、引揚げ＝帰還できなかった元軍人の物語である『人間の条件』（1955）などがベストセラーになることはあっても、「引揚げ」という集合的体験——植民地・占領地からの帰還——が学問的な考察の対象となることは最近まであまりなかったのである。たとえば、90年代以降に日本の政治・思想・運動界をゆるがした「慰安婦」問題は、現代日本社会に大きな衝撃を与え、「戦後」がいまだ終わっていないことを明らかにしたが、同じく植民地・占領地の「被害」体験である「引揚げ」が「内地」においてそのように受け止められることはなかった。

おそらく、戦後日本において「引揚げ」が、一般に国民の物語になりやすい「受難」物語でありながらも原爆物語と違って日本人の「公的記憶」にならないままなのは、まずはそれが植民者たちの物語であったことにその理由を求めることができるだろう。すなわち「加害者としての日本」を含む物語は、戦前とは異なるはずの「戦後日本」では受け止められる余地がなかったのである。

<「引揚げ」の忘却>という事態は、ひとことでいえば、「外地」からの引揚者たちが「内地」でおかれることになった複雑な地政学的・思想的・情緒的配置によるものだった⁵⁾。とりわけ強調しておきたいことは、「引揚げ」とは、占領地や植民地との関係でのみ考えられるべきことではなく、「本土」（＝内地）との関係、さらに引揚者同士の間をも考慮に入れてはじめてその全容が見えてくるということである。すなわち、占領地や植民地に出かける前の「帝国日本」との関係、帰ってきてからの「戦後日本」との関係、さらに引揚者同士の間を総合的に捉えてはじめて「引揚げ」は理解しうる事柄なのである⁶⁾。そして、そのような単純ならざる事態こそが、戦後日本において「引揚げ」が忘却されるにいたった重要な動因であったと私は考える。

先取りして言えば、「本土」の人たちは、政策的には引揚者を迎え入れながらも、植民地・占領地に出かけた人々に対して差別と軽蔑、哀れみのまじった複雑な感情を抱いており、そのような状況の中で、「引揚げ」の経験を本土の人々が記憶化し共有する可能性はなかった。さらに、引揚者たち自身も、さまざまな理由から、引揚げ体験を語ることに積極的ではなかった。その意味では、「外地」の人々と「内地」の人々がともに抱えるようになったそのような心理こそが、「引揚げ」の物語を、国民の「集会的記憶」として定着させ、国民が共有できる「国民物語」たらしめなかったものなのだとと言えるだろう。

その複雑な関係のすべてをここで提示することはできないが、本稿は、とりあえず、このような事態の中でやはり忘却されたに等しい「引揚げ文学」について、今日的な眼から、おおまかなスケッチを試みるものである。

「引揚げ」に対する無関心は、文壇・文学界においても例外ではなく、「引揚げ」との関係で考えるべき作品が少なからず存在するにもかかわらず、戦後日本の文壇や学界は引揚者による文学に大きな関心は払ってこなかった。

たとえば後藤明生をはじめ、日野啓三などは、戦後・現代の文壇において高い評価を受けた作家たちではあるが、彼らを「引揚げ」とのかかわりで考える試みはあまり見られない。現在流通している膨大な数の文学史や文学事典、そして研究書の類の中にも「引揚げ」の項目は皆無で、そのことも戦後日本文学の中で「引揚げ文学」が軽んじられてきたことを証明していよう。

もっとも、引揚げ体験や植民地・占領地での生活を題材とした詩・小説が多くあらわれた1970年代後半までは、引揚げてきた作家たちの表現や問いかけの意味に対しては、わずかながらも注目が向けられていた。同時代の選評や談話などには「引揚げ」という言葉がたびたび登場し、彼らの植民地・占領地体験に関して真摯な関心を寄せる空気があったことが確認されるのである。

たとえば、尾崎秀樹は、五木寛之の「外地引揚派の発想」という文章に注目して、清岡卓行や生島治郎、梶山季之などに触れながら次のように述べている。

ではなぜ今日、このような時点で、「外地引揚派の発想」が問題にされるようになったのか。これは一つに昭和一ケタ世代が、やっとその文学的な発言の場をもちはじめたということであり、さらにいうならば既成の文壇文学に対する新しいバイアスを、そこに求めようとする読者の要求と交錯するところから生れた声だといえよう。(尾崎秀樹『旧植民地文学研究』勁草書房、1971・6、327頁)

尾崎は引揚げ文学にきちんとコミットできた数少ない批評家の一人であったが、それも、おそらくは彼自身が台湾からの引揚者だったことに関係しているだろう。

1979年の雑誌記事「特別企画インタビューポルターージュ日本の“カミュ”たち」(『諸君!』1979・7)も、「引揚げ」に対する当時の関心の伝わってくる企画である。これは、記者でもあった評論家本田靖春が、映画・漫画・文学分野における「旧植民地育ちの引揚者」16人を「インタビューし、まとめた」ものである。この企画でインタビューを務めている本田靖春も「やは

り植民地で生まれた」（本田，同）評論家であった。

この企画は副題が「引揚げ体験」から作家たちは生れた」となっていて、引揚げ体験が「作家」などの表現者の誕生と不可分の関係にあると強く意識されていたことが示されている。本田はここで（彼らが表現者になったことを）「偶然ということは出来ない。おそらくは、一人一人の深部に引揚げ体験が重苦しくわだかまっているのではないか。そして、各自の表現は、取りも直さず、その「後遺症」であるに違いない」⁷⁾としている。先の尾崎同様、本田も「引揚派作家と呼ばれる人たちがいる」と書いており、当時は「引揚げ派」という概念で一定数の作家たちが括られていたことがここからも分かるのである。

しかし、以後、このような尾崎や本田の関心が受け継がれることはなかった。つまり、彼らを旧植民地からの引揚者とみなして「日本の“カミュ”」と呼ぼうとする認識が戦後日本社会に根付くことはなく、彼らの植民地・占領地体験は、たとえ触れられるにしても「戦争」の枠組みの中で論じられるにとどまることになるのである。

先の尾崎秀樹の言葉を借りれば、引揚げ文学は「日本文学史のなかでは、まます」⁸⁾のようなものとして扱われていたが、そこには「日本は、敗戦後二十数年を経た今でも、まだ旧植民地問題についての精神的な決算書をまとめてはいない」と認識される程度には、転機の訪れる可能性は見出されていた。ところが、戦後日本において「アジアの中の日本の位置を、旧植民地という分光器にかけてとらえなおす必要は、文学の場合にかぎらず重要なこと」⁹⁾だったにもかかわらず、そのような尾崎の認識が、広く、重く受け止められることはついになかったのである¹⁰⁾。

とはいえ、本稿は、「植民地」体験の忘却とその背景にある意識を指摘し、そのことを戦後日本の限界として指摘することを目標にしているわけではない。

「引揚げ」は、決して一様には語れない、多様で複雑な体験であった¹¹⁾。五木寛之や宮尾登美子のように「書く」までに長い時間がかかった作家がいたのは、その体験のつらさと複雑さを物語るものにほかならない¹²⁾。重要なのは、そのような「遅延」と「忘却」を認識し、その背景を考察し、さらに、忘れられた「引揚げ文学」の声を今一度聞くことであろう。本稿は、むしろその可能性を探るための試みである。

このような問題意識に基づいて本稿ではまず、日本の戦後文学に植民地・占領地体験とその後の引揚げの体験を素材とした表現者たちの試みを「引揚げ文学」と命名し、その概略について整理しておきたい¹³⁾。

対象としては、明治以降、朝鮮や中国などへ渡っていった日本人の子供として生まれ育ったか、幼少期に親とともに渡って行って、青年期の前後までをそこで過ごし、敗戦後に戻ってきた人たちを中心としている。

「外地」に渡った日本人たちは、子弟が上級学校に進学する頃になると、彼らを「内地」へ送っていた。そのような子弟たちは、学校卒業後ふたたび占領地・植民地に戻るか「内地」に残るかを選択することになるが、いずれにしても家族はそのまま「外地」に残る場合がほとんどであった。すなわち作家本人が「引揚げ」を経験していなくても「家族の引揚げ」を経験しているケースは少なくない。あるいは家族の安否を案じていったん戻った後に同じ引揚げを体験する場合もあった。

「引揚げ」関連手記や文学作品をひもといてまず気づくのは、作品の中の物語が、「日本」という主体の統合化に微細ながら決定的な亀裂を入れていることである。つまり、ここでは植民地の日常の記憶や、戦後日本への違和感とともに、植民地から持ち帰った言葉や文化の「混交」の現場も語られていて、植民地・占領地返還後の「日本」が決して単一の言葉・文化・血統を共有する「単一民族国家」ではあり得なかったことが、そこからは見えてくるのである。

たとえば彼らは雑煮に納豆をまぶした「植民地雑煮」を食し（後藤明生『夢かたり』）、「お袋の味とは餃子」というような日常を生きていた。植民地で身に付けた食文化を維持していたのであり、それは少なくとも当事者たちの代では続いていたのである。さらに、「標準語」でありながらさまざまな国の人々が使う型破りな日本語に加え、植民地の言葉をさえ含んでしまった、いわば「汚染」された「植民地日本語」（後藤明生）を話す存在でもあった。何よりも、「内鮮一体」や「五族協和」のキャッチフレーズのもと行われた日朝・日中結婚の結果としての混血児たちの存在も、そこには見え隠れしている。目立たないながらも、そのような光景を描く「引揚げ文学」が、「まます」（尾崎）扱いを受けたのはある意味では当然と言うべきだろう。

植民地・引揚げ体験を書いた作家たちがそれなりの評価を受けながらも、その作品を「帝国日本」とのつながりで考えるような動きがこれまであまりなかったのは、そのような言葉・文化・血の「混血性」が絶えずあぶり出されるジャンルとして、それらが成立してしまっていたからかもしれない。「引揚げ文学」は、「引揚げ」そのものの悲惨な記憶を忘却せんとする欲望に加えて、「帝国」政策の結果としての混血性を露わにし、新しいはずの「戦後日本」がほかならぬ「帝国後日本」でしかなかったことをつきつける存在でもあったのである。

2. 「少年・少女」たちの引揚げ文学

先の本田のインタビューは、昭和3年から昭和12年までの生まれの人にその対象をしぼっている。すなわち「敗戦・引揚げ体験をもろにかぶったに違いない、昭和一桁組」の詩人や作家、漫画家たちで、そのような体験が彼らの作品に様々な形で影を落としている点では、本田の人選はまことに的を射ていた。

本田は、その「敗戦・引揚げ体験」が彼らの「少年期」であったことにあえて触れてはいないが、本稿で彼らのことにとりわけ注目する理由は、彼らが自らの意志とは関係なく植民地で生まれ育った少年や少女であったということ、つまり自らの意志とは関係なく、占領地・植民地に身をおかれ、かかわってしまったという、その微妙な「位置」にある。当然ながら、彼らの意識は自らの意志でかの地にやってきた親の世代（もっとも、「自らの意志」とは言っても、その多くは家庭・社会構造が強いたものだった。注11論文参照）とは、かなり異なった様相を示している。つまり、彼らにとっては良くも悪くも占領地や植民地が「故郷」¹⁴⁾だったのであり、彼らの感受性は、程度は異なっても植民地の風景や人々によって培われたものでもあった。しかも、たとえば同じく植民地で育った兄弟の中でも、上級学校進学のために敗戦前に「内地」に帰っていった年上の兄や姉たちともその思いは異なっていた。たとえば後藤明生は作品の中で、母親や兄にとって帰国とは故国へ「帰る」ことを意味したが、自分にとっては「連れてこられた」（『夢かたり』ほか）ことになるとしている。つまり、植民地体験と「引揚げ」は、たが

いに重なる部分を有しながらも、場所や年齢や環境によって、当事者ひとりひとりの思いには大きな差があったのである。

周知のとおり、「引揚げ」は植民地化された「満州」や朝鮮半島・台湾だけでなく、東南アジアや太平洋諸島からも行われた。しかし本稿では、とりあえずその数をもっとも多かった台湾と朝鮮半島、そして旧満州地域のみを対象とする。

なお、在日朝鮮人の引揚者（サハリンから）として李恢成がいるように、「引揚げ」とは、単に日本人に限った事柄ではなかった。日本人の移動に押しあげられるような形で多くの朝鮮人たちも満州などに数多く移動しており、彼らの出身地への帰国もまた、日本人の引揚げとともに行われたのである。そういう意味では彼らの引揚げやその文学も、「引揚げ」を考える際には合わせて考察されるべきであろう。しかし、ここではとりあえず日本人を中心にその概略を示しておくことにする。

尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』と同じ1971年に出た「引揚者100人の告白」（『潮』142号、1971・8）というインタビュー記事には、新田次郎、藤原てい、宇能鴻一郎以外にも、榎本捨三、宮本元、島田一男、原田統吉、潮壮介、大牟羅良、榎原一郎、中園英助、椿八郎、森田雄蔵などが作家や評論家として登場している。知名度が高くない文学者のなかにも引揚者は少なからずいたのである。このような文学者たちを対象とする調査・研究も必要と思われるが、本稿ではある程度知名度を得た詩人・作家だけを対象とした。

最初に、占領地・植民地で幼少期・青少年期の大半を過ごした作家たちの名前とともに、生年と出身地、占領地・植民地における最終学校、敗戦時の年齢あるいはいた場所を推定しうる学校などを、年齢の順に記しておく。

埴谷雄高（1909、台湾・新竹生まれ・敗戦前の小学校5年の時本土へ帰国）、湯浅克衛（1910、幼少時に朝鮮・水原。京城中学）、森敦（1912、幼少時に朝鮮・京城。京城中学）、五味川純平（1916、中国・大連生まれ。大連中学）、古山高麗雄（1920、朝鮮・新義州生まれ。新義州中学）、清岡卓行（1922、中国・大連生まれ。大連第一中学）、村松武司（1924、朝鮮・京城生まれ。青州師範学校）、安部公房（1925、幼少期に中国・奉天。奉天第二中学）、小林勝（1927、朝鮮・晋州生まれ。大邱中学四年の時陸軍予科士官学校に入学）、森崎和江（1927、朝鮮・大邱生まれ。金泉高等女学校）、日野啓三（1929、幼少時に朝鮮・大邱。後に京城・龍山中学）、澤地久枝（1930、幼少期に旧満州・吉林）、梶山季之（1930、朝鮮・京城生まれ。京城中学）、林青梧（1930、朝鮮・平壤生まれ）、富島健夫（1931、朝鮮・京城生まれ）、後藤明生（1932、朝鮮・永興生まれ。元山中学）、五木寛之（1932、幼少期に朝鮮・論山。平壤中学）、生島治郎（1933、中国・上海生まれ）、池田満寿夫（1934、中国・奉天生まれ。長家口）、宇能鴻一郎（1934、中国・奉天生まれ）、三木卓（1935、幼少期に大連、新京）、大藪春彦（1935、朝鮮・京城生まれ、新義州小学校¹⁵⁾）、天沢退二郎（1936、幼少期に「満州」¹⁶⁾）、別役実（1937、中国・新京生まれ）、なかにし礼（1938、中国・牡丹江生まれ）。

このほかに評論家として尾崎秀樹（1928、台湾・台北生まれ。台湾帝国大学付属医学専門部中退）、山崎正和（1934、幼少時に中国・奉天）、そしてノンフィクション作家として本田靖春（1933、朝鮮・京城生まれ）がいる。名前が広く知られるには至らなかったが、林青梧は芥川賞や直木

賞の候補に何度もあがっていた作家だった。1930年生まれのエリ京子も生まれてまもない頃上海に移り住み、1945年敗戦直前に内地の学校に編入学している。彼女の場合、いわゆる「引揚げ」は体験していないが、彼女もまたまぎれもない「帝国の子供たち」には違いないので、事件としての「引揚げ」は経験していなくてもその原爆体験と植民地体験を重ねて考える必要もあると思われる。

さらにドラマ作家だが現存する作家として橋田壽賀子（1925、朝鮮・京城生まれ）も記憶にとどめるべきであろう。

中島敦、宮尾登美子、木山捷平、新田次郎、辻亮一、有吉佐和子も朝鮮や「満州」や「東インド」を体験しているが、大人になってからの体験だったり、数年間の滞在だけで敗戦前に帰ってきたケースであり、本稿の考察の関心とはずれるのでここでは触れない。

植民地・占領地で育った作家のうち、湯浅克衛、森敦は敗戦前に本土に帰って成人になった世代として作品活動を開始しているが、ここにあげた文学者たちのほとんどは成人になった戦後に活動を始めている。以下、その文壇デビュー時の活動を簡単に整理しておこう。

埴谷雄高は、敗戦直後の1946年に平野謙や荒正人とともに『近代文学』を創刊し、同じ年に『死霊』を連載しはじめた。安部公房は1947年に『無名詩集』を自費出版し、1948年に満州体験を背景においた『終りし道の標べに』を出している。五味川純平は39才になった1955年に『人間の条件』を出してベストセラー作家となった。梶山季之は1952年に朝鮮における創氏改名の問題を扱った「族譜」を含む作品集を自費出版し、小林勝は「フォード・一九二七」（1956）で芥川賞候補になっている。森崎和江は、1958年に筑豊の炭坑町で谷川雁らと文芸誌『サークル村』を創刊して活動した。林青梧は、1958年に敗戦直後の緊迫した状況を描いた「第七車両」で芥川賞を受賞している。江戸川乱歩の推薦で作品を雑誌に掲載したこともある大藪春彦は、1958年にいわゆる「伊達邦彦シリーズ」の連載を始めるようになる。

こうしてみると、「引揚者」の文学は戦後の早い時期から出されていて、中でも五味川純平、梶山季之、林青梧、そして小林勝はすでに50年代に占領地・植民地・引揚げ体験を作品化していたことが分かる。

しかし、植民地・占領地で少年時代を過ごした人々による作品群が集中的に出て評価もされるようになるのは、1960年代以降だった。

というのも、1963年には別役実が『マッチ売りの少女』で岸田國士戯曲賞を受賞し、1964年にデビューした生島治郎は1967年に『追いつめる』で直木賞を受賞している。村松武司は1965年に『朝鮮海峡』を出し、以後次々と朝鮮関連の詩集やエッセイを出すようになっていた。五木寛之も、1966年に「さらばモスクワ愚連隊」で小説現代新人賞を受賞し、1967年に「蒼ざめた馬を見よ」で直木賞を受賞している。この作品は、後述するように、引揚げ体験を目立たない形で挿入している作品でもあった。後藤明生は1967年に「人間の病気」で第59回芥川賞候補になり、以後二回候補となっている。

1970年には古山高麗雄が「プレオ-8の夜明け」で、同じ年に清岡卓行が「アカシアの大連」で、ともに芥川賞を受賞している。サハリンからの引揚者、李恢成がサハリンを舞台とした「砧を打つ女」で芥川賞を受賞したのも1971年のことだった。ただし、李は朝鮮人であり、「国籍国家への帰還」という意味での「引揚げ」には該当しないので、ここでは省いておく。

翌 1972 年には、日野啓三が引揚げ前後の朝鮮での体験を書いた小説集『還れぬ旅』を刊行し、1974 年に『彼岸の家』で平林たい子賞を、1975 年に「あの夕日」で芥川賞を受賞している。すでに 1967 年に詩集『東京午前三時』で H 氏賞を受賞していた三木卓は、1969 年に、初めての長編として児童向けの『滅びた国への旅』を出し、1973 年に、のちに『砲撃の後で』に収められる小説「鶉」で芥川賞を受賞した。1974 年には、彼らよりはるかに年長である森敦までがこの年に芥川賞を受賞しているのである。画家としての美術活動を 50 年代後半からはじめていた池田満寿夫も、1977 年に「エーゲ海に捧ぐ」で芥川賞を受賞している。早くに作品活動を始めていた安部公房も、戦後 20 年になる 1965 年に、引揚げ体験を本格的に扱った作品『けものたちは故郷を目指す』を出している。

評論家の尾崎秀樹も 1963 年に評論集『近代文学の傷痕』の中で植民地文学の問題を考察し、「引揚げ文学」関連研究書では最初のものとなった。同じ年に山崎正和は『世阿弥』で岸田國士戯曲賞を受賞し、本田靖春は『私のなかの朝鮮人』を 1974 年に出している。そしてその 5 年後の 1979 年に、本田は先のインタビューでインタビューをつとめることになるのである。

こうしてみると、植民地出身の「青少年」たちの活躍はある意味では戦後絶え間なく続いていたと言えるだろう。わけでも、1960 年代半ばから 70 年代の半ばまでのおよそ十年の間に、占領地・植民地出身の人々が次々と登場し、評価も受けていたことが分かる。先の李恢成を含め、受賞にはいたらなかったが、この時期に在日作家の金石範、金鶴泳も何度か芥川賞候補にあがっていることを考え合わせると、引揚げ作家と在日作家の登場の時期はほぼ一致していたとも言える。

とはいえ、文壇は、彼らが引揚者であることに特に注目していたわけではない。村松武司は日韓基本条約が結ばれた 1965 年に『コロンの碑』などの詩集を出して、元植民地と新たな関係を結ぶにあたっての複雑な心境を描いていたが、そのような作品はほとんど注目されなかった。評価された作家たちにしても、必ずしも「帝国」やその終焉とのかかわりにおいて論じられたわけではない。たとえば後藤明生が「内向の世代」とくくられていたことが示すように、彼らを「歴史」の中において考える試みはむしろ希薄だったと見るべきだろう¹⁷⁾。引揚げ文学が提示した政治的意味と問題がきちんと受け止められることはなく、逆に「政治に無関心な世代の登場」といった枠組みでのみ捉えられていたのである。

その後もこの枠組みは変わらず、たとえば日野啓三の作品を語る際には「廃墟」（川本三郎による「解説」、『昭和文学全集〔30〕』小学館、1988）、後藤明生については「笑い」（三浦雅士による「解説」、同上）がその特徴として挙げられている。そのような捉え方は間違っていないにしても、結果としては引揚者としての体験を無化するものとして働き、その後の「忘却」に一助をなしたと言える。日本の「戦後文学」は、帝国の申し子たちが残した文学をその歴史的意味合いにおいて正面から受け止め、考察の対象としようとはしなかったのである。

もっとも、引揚げてきた作家が必ずしもその体験を書いていたわけではない。たとえば埴谷雄高は大岡昇平との対談で次のように語っている。

「(台湾で) 最高に悪いやつは日本人である、日本人である事はとても耐え難いこと」

「そのためにあなたみたいに日本そのものを描く気になれなくなってしまった。僕は妄想

と言っているけど、最高に美化した日本人だけを書こうとしているわけなんだ」（『植谷雄高作品集〔15〕』河出書房新社，1981）

この発言は、植民地から帰ってきて作家になった人たちのすべてがその体験を書くわけではなかったことを教えてくれる。さらに、書かないことが必ずしも植民地問題に関心がなかったことを示すわけでもない。そういう意味で、引揚者による文学は、体験も多様であれば表現のあり方も様々であった。

3. 引揚げ文学者の体験と意識

すでに知られているとおり、引揚者の中でも旧満州地域と朝鮮の北側にいた人たちは、突然ソ連が参戦してきたため、他の地域の引揚者にくらべて遥かに凄惨な体験を余儀なくされた。彼らは、米軍によって日本人保護対策が設けられた朝鮮の南部とは異なって、暴力や強姦、飢え、伝染病、酷寒、集団自殺などの極限状況を経験し、そのさなかで多くの人が命を落とすことになる¹⁸⁾。朝鮮の平壤から引揚げた五木寛之が、1970年、三島由紀夫の死に際して「私は質の死にあまり関心がなく、敗戦のあの時点から引揚げの過程で見た量の死にずっと関心を持ち続けてきた」（『作家の日記』）と語っているのは、その凄惨さを語ってあまりある。

たとえば五味川純平は1943年に満州で現地召集され、ソ連軍と交戦し、部隊の壊滅状態の中で生き残った体験をしている。敗戦を29才で迎えるが引揚げてきたのはそれから三年後のことだった。古山高麗雄は、1942年に召集されて、1943年からビルマ、雲南省などで戦闘を経験するが、捕虜収容所の仕事をしたために敗戦後は戦犯容疑者としてサイゴン刑務所に送られ、1947年に日本人収容所に移される体験をしている。安部公房も、奉天（現・瀋陽）に帰省していた際終戦を迎え、医者だった父親を伝染病で失っている。（五木寛之や後藤明生など、引揚げ文学者の多くは、一般の引揚者の多くがそうだったように敗戦直後に肉親の死を経験している。）

清岡卓行は進学のために敗戦前に「内地」に戻って第一高校と東大に入学していたが、敗戦の年（22才）に大連に帰省して敗戦直後の貧乏生活を経験した末、舞鶴に引揚げている。日野啓三は38度線以南の京城（現・ソウル）にいたため満州や北朝鮮ほどの厳しさは経験していないが、父の郷里の広島に引揚げてから山畠を耕すような体験をしている。後藤明生は、北朝鮮の元山中学1年の時に敗戦を迎え、引揚げの途中、祖母と父を伝染病で亡くし、自らの手で埋めた体験をしている。さらに母や妹たちとともに、夜の38度線を歩いての逃避行も経験している。「量の死」発言をした五木寛之は、突然ソ連軍が家に侵入し、病気の母親を床ごと庭に投げつけられ、その際無力だった父親を生涯許せずに不和を通した（『運命の足音』41頁）。その後母親は死に、わずか13才の五木少年は、母親をリヤカーに乗せて共同墓地へ運んでもいる。さらに引揚げの際、日本人の「赤ん坊を引き取ってくれる相手を探し」、「朝鮮人のおばさんに、その話をもちかけた」（同、47-48頁）ともいう。大藪春彦は、引揚げの際、「暴力」を目にし、1946年に闇船で引揚げた。そのような暴力体験は、後に大藪の小説の主調音ともなるのである。

三木卓は、10才のときに新京（現・長春）で敗戦を迎え、空き家で暮らしながら街頭でタバコ売りをする体験を持ち、この間やはり父親と祖母を亡くしている。なかにし礼も、敗戦直後

に父親を亡くし「死体を山積みにしたトラックに積み込まれ、ハルビンの郊外へ運び去られてしまった」体験をしている¹⁹⁾。別役実は、8才のとき、新京（現・長春）でソ連軍占領下の飢えや恐怖を経験、父親を亡くした。1946年に母や兄弟たちとともに引揚げたものの、高校卒業まで全国を転々するような体験をしている。なお、評論家の山崎正和も1946年に奉天で父親を亡くしている。

このように、植民地・占領地の少年・青年たちは、貧困、肉親の死、逃亡、飢えなど、多くの引揚者たちが経験したことを同じく経験していた。そのような苛酷な経験を彼らが自らの「原体験」²⁰⁾とするのは不思議ではないだろう。

そのような「原体験」を持つ「明太の子」²¹⁾（＝朝鮮生まれの朝鮮育ち）たちが日本に帰ってから出会った「祖国」における「内地」体験や認識はきわめて複雑なものだった²²⁾。それは、劣等感と優越感の入り混じったものであり、以後彼らは日本における「異邦人」²³⁾としての自己認識を育てて行くことになるのである。

彼らが帰国後に最初に感じたのは、それまで観念的に注入されてきた「祖国」の、想像と期待とは違って、失望のまじった驚き、それにとまらぬ優越感であった。

ところが、われわれは裏切られたのである。最初の驚きは、朝鮮人のように働く日本人がいるということであった。〔中略〕日本人も他人のものを盗む——この驚きは大きな衝撃であった。（本田靖春）²⁴⁾

帰って来ていちばん驚いたのは、日本にも労働者がいるんだと。（尾崎秀樹）

上陸したときだって、おれ、日本はずい分汚ねえところだなんていう印象しかないもの、まずトイレがひどいよね。水洗じゃないんだから。おれ、汲取り式なんていうの、想像もしてなかったからね。（生島治郎）

転入したのが世田谷の中学校だったせいで、ひどく遅れたところへやって来たという、かなり大きな落胆があった。（略）京城の私の卒業した小学校でさえ、堂々たる鉄筋コンクリートの三階建てだったのである。（略）地つきの家庭の子弟たちは、風貌からしていかにも野暮ったく（傍点引用者）、すでに多くの人たちによって語られている閉鎖性を露骨に私に対して示した。（本田靖春）

それまで「手を汚す仕事はもっぱら朝鮮人」（本田靖春）であるような環境で育った少年たちが「水道も電灯もな」い²⁵⁾田舎に引揚げて来て、「植民地育ちの特有の優越感」²⁶⁾を覚えたのはむしろ自然なことであった。彼らが住んでいた植民地や占領地は、近代実験的な経営の結果として本土より文明化された設備を備えていたのである。植民地の少年たちは、「内地」＝「本土」への同化意識を強化するような教育を受けていたので（たとえば、朝鮮では本籍地の住所を暗誦することが、中学の入試問題にもなっており、教科書に載っている伊勢神社、富士山などは「外地」の人間でも同じく「日本人」であるとの意識を植え付けるには欠かせない教育材料であった。

後藤明生や小林勝の作品はそのようなことにたびたび触れている)、いまだ見ぬ「内地」に対しては強い憧れを持っていた。そこで日本の豊かな木々に驚き、愛国心をかき立てられながらも、失望もまた大きかったのである。

しかし、まもなくそのような優越感は劣等感に変わる。

植民地生まれには内地に対する強い憧れがあって、イマジネーションの世界は純化される一方である。

実際の生活面でも日本人は一段と高いところにいて、手を汚す仕事はもっぱら朝鮮人がすることになっていた。つまりは支配者である。だが、そういうわれわれの上位に、別の人種がいる。それが内地の人たちであった。(本田靖春)

ぼくらが学校へ入って行くと、日本は食う物ないのに、お前らまで帰って来た、とほかの子供にダイレクトにいわれるわけですね。そうすると、あ、本当にすまない、という感じはするわけです。(三木卓)

このように、600万人以上の人々が一斉に帰国してきたことを本土の人たちから「ムダめし食いの連中が帰ってきた」²⁷⁾と受け止められたことに気づき、引揚者たちは深く傷つくことになった。

しかも、そのような差別は、単に貧乏という要因のみに向けられていたのではなかった。引揚者たちが使用していた「言葉」もまた、彼らの異質性を際立たせ、本土の均質性に亀裂を入れるものとして差別の対象となっていたのである。

〔新潟に行って〕そうしたら言葉が通じなくて、朝鮮人、朝鮮人っていうわけですよ。関西弁ですからね。(赤塚不二夫)

地方から出て行った人が多かった親世代と違って、引揚者・子供の世代はいわゆる「植民地標準語」(後藤明生)で教育されていた。しかも、教科書は標準語でも、親たちの方言と学校での標準語、さらに植民地の人々やそこに来ていた他民族が使うビジンの日本語と植民地言語の中で、彼らは「どうも日本語に自信がない」(後藤明生『夢かたり』)状況で育っていった。父親を「おとうさま」と呼ぶような奇妙に上品な「標準語」(=植民地弁)の日常を生きた引揚者少年・少女の多くは、そのことによっても差別されていたのである。

そのことは、「おれが喋ることが通じない人間がいるのが当たり前だと思っている世界と、そんなのいるはずないと思っている世界とは、かなり違う」との認識を作り出し、わけてもそのような閉鎖性が強かった日本社会や田舎の閉鎖性を強く意識する心情をも育てていた。

大藪春彦は、「青空闇市場へ行ってかっぱらっちゃ、捕まったときには殴られ」たという体験を語りながら、「ところが日本へ帰ってみると、それどころじゃない」、「言葉がだいたい違」う世界で「転校するごとにチェーンで殴られ」たと書いている。「そのうちこっちもドス持って。最初にいっばつやっておかないとやられますからね。ほんとに血まみれで闘って、やっと生き

延びました」と言う。日本社会の差別と暴力が引揚者少年たちの暴力性をも育てていったことが分かるのである。

「方言が物凄く強い」田舎で「お前のいうことは分からない——それでずい分いじめられた」とする、漫画家、赤塚の言葉は、戦後日本において、「田舎」といえども「内地」人としての中心意識を共有しており、その上での周辺部差別、つまり外地差別や引揚者差別があったことを教えてくれる。しかも、植民地・占領地の都市部の多くが本土の田舎より文明化されていたことを考え合わせると、このような差別の構造のねじれも見えてくる。すなわち、植民地に対する帝国の差別意識は「文明化」された側としての優越感に支えられていたにもかかわらず、そのような差別構造が、「内地人」と引揚者の間で必ずしも成立していなかったことが分かるのである。そこでは文明度よりも定住者としての権力が発動され、引揚者たちは都会・田舎といったそれまでの差別構造を超えたところで差別されていた。引揚者の成績が「上位」(後藤明生)だったことも、占領地・植民地の文明度を暗に示すものだったが、それは引揚者たちのひそかな優越感を支えはしても彼らの居場所を作るほどの効はなさなかつた。そこで彼らは「わざと負ける」(同)ような屈折した選択を繰り返しつつ、「本土」の人々に表面的に同化しながら戦後日本を生きていくことになる。

引揚者が差別された原因については別稿でも述べたが²⁸⁾、目立つ原因のひとつとして彼らの貧困をあげておくことができる。引揚者のほとんどは、それまで築いてきた地位と財産、さらに家族を含む「人」的財産をすべて失い、結果として総体的「貧困」に陥った。彼らの多くは、近代日本の国策としての「海外移住」政策に乗せられて国外へ追われていった貧しい人々だったが²⁹⁾、戻ってきた後も依然として貧乏で、物資の足りない戦後日本ではお荷物な「余計もの」でしかなかったのである。

そこで引揚少年や少女たちは、支配者であり、世界と呼吸する‘文明’都市出身者としての誇りや優越感を胸に抱きながらも、帰ってきた「祖国」としての「戦後日本」では、「適応不全意識」(本田靖春)と言われるような劣等感に悩まされることになる。長い歳月を、「心の底の泥」(日野啓三『彼岸の家』、83頁)の中で、時として「リューマチ」(森崎和江『こだまひびく山河の中へ——韓国紀行八十五年春』、朝日新聞社、1986、8頁)のような痛みを鋭く感じる身体をかかえつつ、戦後日本を生きてきたのである。

4. 「記憶」の抑圧と封印

植民地・占領地体験を伴う引揚げ体験は、必ずしも簡単に語り得る体験ではなかつた。むしろ、手記などが膨大に存在することは確かだが、だからと言ってそのようなものすべてが語るべきことがらをすべて語っているとは言えない。なんらかの言葉を紡ぎながらも、いざ話すべき、話したいことは語られてないこともありうるからである。

たとえば、以下の一文はそのことをめぐる心理的抑制の存在を気づかせてくれる。

私は礼をいうと、そのまま待合室を通り抜けて、駅前の様子を一渡り眺めました。駅員の教えてくれた橋は見えませんでした、駅前にはタクシー乗り場とバス停を兼ねた広場になっ

ており、目の前にまっすぐ広い道路が走っています。その道路を行けば、多分橋につき当たるのでしょうか。広島に原子爆弾が落とされたことは、お父さんもご存知でしょう？もっとも当時は特殊爆弾とかいわれていたようですが、現在広島の人たちは原子爆弾のことを「あれ」と呼んでいるそうです。横川付近が果たしてその原爆の被爆地であったのかどうかさえ知らない私にも、その気持ちだけはわかるような気がします。原爆は現在では世界とか人類とかの問題として議論されておりますが、誰にでも、「あれ」としか呼びようのないもの、「あれ」としか名付けたくないものは、ある（傍点引用者）だろうからです。原爆を「あれ」と呼んでいる人たちの気持ちが私にもわかるような気がするというのは、そういった意味です。お父さんにも「あれ」がありますか？それとももう「あれ」などというものはお父さんとは縁無きものなののでしょうか？（後藤明生「父への手紙」『思い川』講談社、1975）

「あれ」という言葉は、具体的な表現を拒んでいる。ここで言われる「あれ」が植民地体験全体ではなく事件としての「引揚げ」を指していることはあきらかである。そして、引揚げの際に見聞きしたこと、恐怖、悲しみ、寂しさ、絶望、さらにそれらをめぐる醜悪な欲望の模様は、語りえない、語ること自体が苦痛な体験だったとも言えるだろう。そうである限り、当事者たちにとっては口にすることさえ躊躇されることが「世界とか人類とかの問題として議論」されることに抵抗を感じたとしても当然だ。しかしそのことは、逆に「あれ」が、そんなふうには単純に語られるようなことではなく、そしてたとえ語ろうにも、それがかえって自己と周囲の抑制や抑圧を意識させてしまうような体験だったことを教えてくれるのである。

たとえば、五木寛之が直木賞を取った小説「蒼ざめた馬を見よ」（『別冊文芸春秋』第98号、1966・11）は、そのような、語ることの不・可能性について考えさせるテキストとしても興味深い。

「——あれは、何の音だ」

「誰かが階段のバケツをけとばしたのよ。一階まで落ちて行ったらしいわ」

鷹野は大きな息をついた。そして、起ち上がると、テーブルの上のブレンダーをコップに半分ほどついで、一息にあおった。

椅子に腰をおろし、もう一杯ついだ。オリガは床に寝転んだまま、そんな鷹野をじっとみつめていた。

「あの音は嫌いなんだ」

と鷹野は言った。「バケツを叩く音を聞くと、たまらなくなる。いやなことを思い出すんでね。変な話だが」

鷹野はそれを振りはらうように、顔を反らしてコップをあおった。だが、やはり駄目だった。

<焼き日ですよ>

とあのいまわしい声（原文傍点）が、ふっときこえた。彼は、その間のびした声と、バケツを叩く音から、いまだに逃れられないでいた。あれから二十年ちかい年月が流れている。だが、時間の淵をひと跳びにして、その声はやってきた（傍点引用者）。

それは日本が戦争に敗れた一九四五年の冬、発疹チフスの発生した北鮮の邦人収容所で、毎週月曜日の朝、火葬当番が各棟の間を叫んで回る奇妙な挨拶だった。当時、十二歳だった鷹野とその家族は、敗戦と同時に延吉から南下して、その街で長い当てのない冬を過したのである。（五木寛之「蒼ざめた馬を見よ」『五木寛之小説全集〔1〕』、講談社、1979、207-208頁）

日本とロシアを舞台に、一種の推理小説の形式を取っているこの若き日の小説において、主人公が「バケツの音」に悩まされることはさして重要な伏線になっているわけではない。主人公を心を病む人物として設定するだけなら、家庭内暴力や失恋の話でも充分その役割は果たしたであろう。

しかし、ここで主人公を苦しめているのは、まさに引揚げの際に見た場面である。しかも、この作品はそのことをとりわけ強調して書いているわけではない。体験としては書きながら、これがどういう体験だったのか、なぜこういうことがあったのかに関してはいっさい説明がないのである。

つまり全体のストーリーからすると、ここにおける「引揚げ」の話はほとんど目立たないと言ってもいいくらいだ。しかし、それでもこのように書いてしまったというのは、このことこそが書きたかった、というふうにみなしていいはずである。

もちろん、だからといってきちんとこれを耳にとめてくれる「聞き手」を想定しているわけではない。そのようなことを期待したのなら、数十年経ってから語りだしたように、前後の関係を筋道をつけて語ったであろう。

つまり、ここでの語りは「語っていないながら語っていない」ものとも言える。つまり語ることの不・可能性が書かれているのである。つまり、引揚げ体験は、当時の五木にはまだ正面から書くことはできないようなものだったが、間接的な形ででも書かねばならないものだったことが分かる。それは、後藤の語る「あれ」というような語り方と通じるものとも言えるだろう。

「引揚げ」とは、このように、語ることの不・可能性を顕してしまうものだった。しかも、書くこと＝表現をめぐる格闘は、単に「引揚げ」に限ることはなかった。生まれ育った植民地の記憶について、たとえば後藤明生は次のように語っている。

戦争が終わったとき、私の少年時代は終わりました。

そして私は、同時に「生まれ故郷」も失ってしまったわけです。つまり私たちは「生まれ故郷」を追放されて「祖国日本」へ引き揚げてきたわけです。（中略）確かに私は日本人であるという理由によって二十七年後の今もなお「生まれ故郷」から拒まれているのかもしれない。しかし「生まれ故郷」についての私の記憶だけはだれも拒むことはできません（傍点引用者）。（後藤明生「父への手紙」）

「少年時代は終わった」とは、単に年齢のことを指しているのではない。それは、もはや「少年」に甘んじていられる甘美な時代が終わった、ということであろう。それは、「少年」の思い出の背景となる空間が失われてしまったからにはほかならない。すなわち「追放」と「生まれ故郷」

から拒まれている」という拒絶ゆえのものだ。しかし後藤は実際には、群を抜く緻密さで植民地の風景と人々の記憶を書いている。そしてそのような、「記憶の追放」にあらがうことは、植民地の「定住者中心主義」をあぶり出すものにもなった。

後藤は、「懐しいと言ってはならぬ」として、甘い記憶と表現を極力抑制した小林勝と違って繰り返しささまざまな記憶を振り返り書き残し、「語る」ことの可能性と権利を主張した。それは、帝国・植民地の記憶を封印し忘却しようとする日本と朝鮮の「定住者」の抑圧に対抗することでもあった。そしてそのように定住者の共通の記憶に亀裂を入れることで、「非定住者」の感覚を維持し続けていたのである。

後藤は、次のような興味深い発言をしている。

面白いのはね、引揚者が二通りになるんですね。つまり積極的かというと、友達をつくって同化して行こうというグループと、それから標準語を守って、本当につながった二、三人の引揚者だけがかたまっているのと、この二通りに分れてね³⁰⁾。

後藤は、はじめは「同化」しようとして結局はやめてしまった経験話を話しているが、実際には「記憶」では同化しなかった。そして、後藤の言う「同化」に、引揚者の「戦後」を解く鍵が存在する。つまりその「同化」の形や深さによって、引揚者は様々な形で戦後日本を生きるようになったからである。そして作家となった人の多くは、「初めからわりにさめた傍観者というか、観察者という感じで、日本の社会へ入って来た」とする澤地久江や、「おれは違うんだなあ、招かれざる人間なんだなあ、と。この実感は、三十何年たってもなくなるね」とする尾崎秀樹の感覚を共有するものだった。つまり、彼らは表面的な「同化」いかんにかかわらず「招かれざる人間」としての疎外感をもとに、「傍観者」「観察者」たろうとしたのである。

本土に引き揚げてきたのではない。本来の土地を追われて異郷に強制送還されたのだ。魂のなかの母親的なものの現実的対応物を奪われ、消されてしまったのだ。〔中略〕どうしても違和感を感じまして〔中略〕自分の中の小鳥をひねり殺した気がしますね。そのときに、自分の中の人間らしい感情のある部分を殺したって気がしてしょうがない。〔中略〕そうしなければ生きて行けなかった。(日野啓三)

「自分の中の小鳥」とは「魂の中の母親的なもの」をおいてきた故郷にはかならない。そこを「追われて」きて「現実的対応物を奪われ」た少年たちが、「本来の土地」ならぬ「異郷」で、居場所を見いだせずに浮遊するであろうことは想像に難くない。しかしそれでも「祖国」の中で生き続けるためには「自分の中の小鳥をひねり殺」すほかに、彼らはいわば母親を失った孤児のようなものになるほかなかった。彼らが「異郷に強制送還された」存在だったということは、引揚げ少年たちが、戦後日本における精神的ディアスポラにはかならなかったことを示す。「帝国」= 支配する側もまた、ディアスポラを生むのである。

「戦後三十四年も経て、私はこの風土に根づいたという感覚を、いまだに持てない。〔中略〕自分がこの国の人たちと、かなり異質だという認識を捨てることが出来ない」(本田靖春)と吐

露させるような違和感の根源はここにある。さらに、「よくばりの農民に対しては憎悪を抱いている」とする別役実の言葉は、ナショナリズムを支えてきた農本主義の主役＝「農民」たちが、ほかならぬ「定住者」の中心的存在だったことも示すものである。

引揚げ派は地元から拒絶される一方で、自分からも“おりた”ところがある。地方にいた人は、とくにその感じが強い。そして、そこには、植民地育ち特有の優越感が働いている。(略) おりたのは、文学書に親しんだのがきっかけであった。小説でも書こうというのは、まぎれもなく、通常の競争をおりた人たちである。作家に引揚者が多いのは、いまさらこと新しくいうことではないかも知れない。(本田靖春)

「引揚げ」体験を経た少年少女たちを「書くこと」にせき立てたのは、ひとえに、そのような「定住者」の世界に対する違和感、優越感、劣等感、引け目、不遇感に基づく、外部者、余計ものとしての自己認識を進んで受け止める「非定住者感覚」だった。日本人を「原住民」（別役実）と眺め、自らを「在日日本人」³¹⁾と認識させ、書くことを、「下宿料」（本田靖春）を支払う行為として認識させていたのは、「戦後日本」の定住者中心主義だったのである。

それにしても、「祭り」などに感情移入せず、「つけものなど数ヶ月切らしてもよし」との感覚を持ちつづけて「日本の伝統的なものって、ほくの中には何もない」³²⁾（天沢退二郎）と言わせていた感覚は、日本が「日本自体が変化しなければいけなかった」（後藤明生）とする期待を満足させるものだったかどうか。いずれにしてもその射程の中に「引揚げ文学」の可能性は存在していると言える。

三木卓は、初めての長編童話のなかで次のように語っている。

こうして、ほくは知ってます。楊が撫順で技師になっていることも、白系ロシア人の女の子のアンナがソビエトに帰ってピアニストになっていることも、そのほかの子供たちも、みんなこの世界のどこかにいるのです。

幼い日々、それに続く日々がどういとおとなを作っているのだろう。ほくたちの子供だった日々は、不幸せだった。国境が、差別が、政治が、僕らをともに共に未来をつくる仲間にならなかった。

（三木卓『滅びた国の旅』1969、講談社2009年復刊、220頁）

引揚げ文学は、彼らの「幼い日々」にあたる植民地占領地体験と「それに続く日々」にあたる戦後体験をもとどめている。そして彼らが「どういとおとな」になったのかも見えてくるのである。しかし、その「子供」「少年」たちの成長を、戦後日本は見ようとはしなかった。

5. もうひとつの「植民地」風景——「子供」の可能性

「引揚げ文学」から見えてくるのは、「再ディアスポラ」感覚で眺めた「戦後日本」の姿だけではない。言うまでもなくその前史としての「引揚げ」の際の「難民」としてのトラウマ、さ

らにそのような「引揚げ」を強いた原因となる植民地体験がそこには描かれている。引揚げの際の凄絶な悲惨とともに、被植民者に対する植民者の抑圧（小林勝）や様々な人種が入り乱れる植民地の帝國的風景（三木卓、小林勝ほか）が描かれるのは当然として、注目すべきは、植民者の棄民性（三木卓）や、被植民者と植民者間の転倒した心理的暴力（小林勝）などが描かれるということである。それらは、これまで考えられてきた「植民地」や「引揚げ」の姿にくつもの亀裂を入れている。それはおそらく、引揚者たちが「引揚げ」という再移動の経験をしたからこそ書けたといえるだろう。その諸相の詳細については稿をあらためて論じたいが、ここでは参考までに西洋の引揚げ（植民者）文学をとりあげてその一端を見ておくことにする。

日本の「引揚げ」文学が「帝国」が生んだものであるように、日本より先に帝国主義に身を乗り出した西洋諸国にも当然ながら「引揚げ文学」とみなすべき作品は多く存在する。そしてここでも「植民地」と「帝国」についてすぐれた考察を残してくれているのは、植民地で育った「子供」たちである。

日本の引揚げ文学の多くのなかで、大人の植民者たちは、その子供たちに、被植民者との間に横たわる空間的・文化的・心理的境界を越えることを禁止している。それは、支配者でありながらも、数の上ではマイノリティでしかなかった植民者たちの、被植民者に対する潜在的な恐怖ゆえのものと言っている。ところが、植民者の子供たちの一部は、「混交」を恐れてのそのような憂慮と恐怖を無視し、その世界へ果敢に入ってもいた。たとえば、『ジェイン・エア』（シャーロット・ブロンテ、1847年）におけるロチェスター夫人（＝「狂女」とされた女性）を主人公に設定してその前史とも言える作品を書いたジーン・リース（1890-1979）は、『サルガッソーの広い海』（1966）の女主人公に次のように言わせている。

いいえ、朝は幸せだったと言ったのよ。午後はそうではなく、日が沈んだ後はいつも不幸せだった。日が落ちるとあの家は不吉だったわ、そういう場所もあるのよ。そして、あの日がやってきた…… 白い黒んぼのように育った私に気づいて母が恥じた日が。あの日からもかも変わってしまったわ（傍点引用者）。そう、あれは私のせいよ、母が私たちの生活を変えようとやみくもに計画をたてはじめたのは私のせいだったの。（小沢瑞穂訳、『世界文学全集Ⅱ-01』河出書房新社、2009、384頁）

イギリスの植民地ドミニカ島で生まれた主人公は、植民地の人々に「白いゴキブリ」と言われながら育つが、そのような嫌悪の視線は、単に被植民者からのものではなかった。それは「純粹な」植民者一世にあたる親たちからの視線でもあったのである。植民地の子供たちの遊びや食べもの、さらには仕草までまねることを禁じられていたことを湯浅克衛（「カンナニ」）や後藤明生（『夢かたり』ほか）も書き残していて、そのような禁止と嫌悪は実のところ「帝国人」に共通のものだったことがわかる。

そして、「植民地」の惨めさと悲惨を誰よりもしっかりみつめていたのは植民地で育った少年・少女だった。彼らは、被植民者に加えられる拷問の痛みと恥をあたかも自分の痛みであるかのように感じとり（小林勝、五木寛之）、植民地の飢えにも想像力を働かせ（小林勝「赤ん坊が粟になった」）、植民者の前で泣き叫ぶ被植民者の姿（村松武司「朝鮮植民者」）や、植民者と被植

民者の住まいの差異をもしっかり見届けていたのである。

たとえば、旧東インド地域を植民地化したフランスの作家、マルグリット・デュラス（1914 - 1996）は、『太平洋の防波堤』（1950）のなかで、フランス領インドシナについて次のように書く。

まさに植民地全盛時代だった。何十万という現地人が、十万ヘクタールに及ぶ赤土に生えている木の樹液の採取に従事し、その木に刻み目をつけて液汁を取るために、彼らは自分の血を採取されていた。その十万ヘクタールの土地は、莫大な財産を持った、何百人かの白人の栽培場主の所有物となる前から、たまたま赤土と呼ばれてはいた。ゴム液が流れ、血も流れる。だが、貴重なのはゴム液だけで丹念に採取され、採取されれば利益を生む。血は無駄に流れてゆくだけだ。（傍点引用者）いつかは大群衆が立ち上がって流した血の代価を問いに来る日がくる、などということはまだ考えるのを避けていた時代なのだ。（田中倫郎訳、『世界文学全集Ⅱ-04』河出書房新社、2008、158頁）

このようにデュラスは、植民地における搾取をしっかりと描いている。しかもそれだけでなく、「植民地の小さな植民者」たちは、被植民者による植民者の蹂躪（= 関係の転倒）をも見逃さずに描いているのである。あるいは、リースは次のようにも書いている。

それから疲れたらしくロッキング・チェアに腰をおろした。黒人の男が母を椅子から抱きあげてキスするのが見えた。男が口を母の口に重ねると、母は彼の腕の中でぐったり柔らかくなり、男は声をあげて笑った。黒人の女も笑ったけど怒っていたわ。それを見て私は逃げ出したの。泣きながら帰っていくとクリストフィーヌが待っていたわ。（前掲『サルガッソーの広い海』387頁）

森崎和江は、被植民者少年たちによる好奇の目——あきらかに性的まなざしである——を描いているが、リースが描いたのはその欲望が完遂された場面だと言えるだろう。この場に「黒人の女」も同席しているのは、この蹂躪が、男女の間の性的関係を超えての民族的 = 人種的、つまりは植民者と被植民者のそれであることを示す。この場面における「母」の受動性、男の笑い、黒人の女の笑いは、そのことを通してあらゆる愛の可能性を無化する。子供の白人少女が「逃げ出す」ほかなかったのは、そのキスが愛のキスではなく制裁の場でしかないことを感づいてのことなのだ。

そのような転倒した構図に気づき書きとめ得たのは、作家がすでに「元植民者」でしかなく、植民者でありながら権力の中心とはなりえない弱者性を帯びていたからと言える。

植民者の多くはあきらかに裕福な支配者だったが、だからといって必ずしも幸せだったわけではない。さきの例文ですでに彼女はその不幸を記しているが、さらに、リースは「私の母にしたって、どんな正義が与えられたというの？」（『サルガッソーの広い海』398頁）と訴えていて、植民者たちにおける「正義」がすべての植民者に分け与えられていたわけではなく、ジェンダーや階級によって区別される、留保つきのものだったことを示す。

そもそも、植民者の多くは「棄民」であった³³⁾。湯浅克衛の「カンナニ」の父親は「餓になった」地方都市労働者だったし、五木寛之の父親は農村部に残ることのできない三男だった。彼らは植民地に渡ることによって多くはそれまで以上の生活資源を得ることができたが、湯浅の「移民」の松次郎のように、東洋拓殖株式会社に詐欺に近いやり方で分譲してもらい、その後は25年かけて耕作した土地を近代化の波に飲まれる形で取り上げられる（こぎれいな家をあてがわれはするが）ことも少なからず存在していたのである。つまり、帝国が求めた文明化は被植民者のみならず、帝国民をもその犠牲にしていた。そしてそれは、帝国内の植民地・本土内の内国植民地においてであった³⁴⁾。

同じく、デュラスも「耕作に向かない土地を総督府が分譲する」(『太平洋の防波堤』19頁)、「誤った希望を抱かせるためのまさに囿」(同265頁)などを書くことで、彼らが国家にだまされて植民地へ行かせられ、そこへの定住を余儀なくされることで帝国の領土拡張の一翼を担わされていたことをも書き残している。

このような、植民地における逆転やねじれを見逃さずに描き得たのも、彼女たちが「子供」だったこと、つまりまだ「植民者」としてのアイデンティティが十分に身につけていない立場にいたからこそ可能なことだった。構造的には植民者にほかならないにしても、ジェンダー性や年齢や階級によって彼らは弱者でもありえたからである。植民者でありながら女たちが狂気になり、子供たちが心に傷を負うというようなことがありえたのもまさにそれゆえのことだった。同じデュラスの『愛人(ラマン)』(1984)には次のような一節もある。

彼女たちのうちのあるものは気が狂ってしまう。またある女たちは口をきかぬ若い女召使いに見かえられて、捨てられる。見捨てられた女たち。この言葉が彼女たちをぐさりと刺す音が、この言葉とともに広がるうわさが、この言葉とともに与えられる平手打ちの音が聞こえる。自殺する女たちもいる。(清水徹訳、前掲『世界文学全集Ⅱ-04』, 2009, 356頁)。

日本なら小林勝が、植民地や被植民者に対する無限の愛情を書き留めながらも、被植民者の暴力とそれによる違和感をも同時に書き残している。それはたとえば植民者少年にセクハラまがいのことをする被植民者の女性や、お土産を持って見舞いに来た植民者少年にお土産を投げつける大人の被植民者に対するものである。そこでは、被植民者でありながらも彼らが「大人」や「男性」としての属性を使つての暴力を働くことが可能だったことが示されるのである。

もっとも、このようなことが植民地における差別構造を覆すことになるわけではない。とはいえ、このようなことは、これまでのポストコロニアリズムの認識の修正を迫るものではある。何よりも、「植民地」とは、植民者にとっても(自発的に見えても構造的に)「移動させられた」場所にほかならず、そうである限りそこは植民者たちにとっても決して安穩たる場ではあり得なかった。この点を認識することこそ、帝国主義に対する根源的な批判となりうるはずだ。

このように、「植民地」のもう一つの姿を見ることは、ポストコロニアリズムの修正を迫ると同時にポストコロニアリズムの思想を強化する。重要なのは、「祖国」であれ「植民地」であれ、そこはしよせん「元定住者」の空間であるほかになく、そうであるかぎりそこではつねに定住者中心主義が暗に働いていたということである。そのことは、植民者がその地を「追放」される

ことでようやく露わになるのである。

6. 「当事者＝非定住者」感覚から

激励されると、いくらか気持ちが安まるのだった。だが、西野から激励されると、何か載せられているような感じがつきまとう。やはり久治は、西野が手伝わないことにこだわっているのである。しかし記念碑といってもなあ——久治は思うのだった。——やがてこの市街図を見ても、何の感慨も感興も起こさない人たちがばかりになるわけだ。シーちゃんや、シーちゃんに惚れた人たちには、カフェー千城という文字は心に響く。晷屋の清さんには、磯野旅館という文字は胸に沁みる。——だがシーちゃんも死んでしまうし、清さんも死んでしまう。千城も磯野旅館もなくなってしまう。建物はもう、とっくになくなっていくかもしれないのだ。それは思い出の中にしかない。その思い出がなくなる時、千城も磯野旅館も消えて、紙の上に文字が残るだけだ。記念碑とは、そういうものなのだろうか？そして自分たちが死んだ後、子供たちは、その記念碑の紙切れを見て、どう思うのだろうか？シノは市街地を見て、どう思うのだろうか。（古山高麗雄『小さな市街図』河出書房新社、1972、212頁）

古山高麗雄は植民地体験の「記憶の死」（同）を恐れた。そして、「戦後日本」の状況は、その憂慮が間違いではなかったことを示している。そのような「記憶の死」は、実のところ植民地でも起こるのであって、「解放」後の韓半島でも、百万人近くその地に住んでいた日本人のことはすっかり忘れ去られている。そのことは、「移民」＝非定住者のことは「定住者」には関心を払うべき対象ではなく、「国民国家」というものが所詮定住者中心のものであることを示すものだ。そこにかつて存在した人々の記憶が忘却されてきたのは、「国民国家」の共有すべき「単一民族」の記憶と相反するものだからである。

引揚者の記憶を受け止めることは、国民国家がほかならない「定住者中心」の機構だったことを知る上でも必要だ。それは、「在朝日本人」や「在満日本人」たちがどのように「在日日本人」となり、そのうち「在日」の認識を捨て去り、あるいは維持し続けていたのかを見ることでもある。それは、「戦後日本」と「戦後日本文学研究」が排除してきた帝国の記憶の様相に向き合うことでもあり、それは「移動」と「定着」にまつわる、近代国民国家の権力構造を見極めることにもなるだろう。

満州などに渡っていった人たちには反体制的な人が多いが、五味川純平の『人間の条件』も冒頭からそのことはしっかりとおさえて書いている。「植民者」たちが必ずしも「帝国野望」や「一攫千金」を夢見ての人々だけでなかったことを知ることは、「帝国」の複雑な構造を今一度見るためにも必要だ。

そして、引揚者たちもまた、植民地での安泰な記憶を囲いつつ「帝国意識」を温存し自らの「在日日本人」性を封印して他の「在日」朝鮮人などへの差別意識を温存し続けたひとたちと、反体制的でナショナリズムに批判的なひとたちとに別れた。それはどちらも彼らにおける「移動と再移動」体験ゆえの認識と姿勢だったが、「戦後日本」は、その体験をどのように生かしたのか。

そのことが今後検証されるべきであろう。

わけても引揚者の一部が維持した「まま子」意識は、「内地」の嫡子性をめぐるイデオロギーをあぶり出し、「内地」(=本土)中心主義や混血性を隠蔽したことが「単一民族国家神話」を支えたことも見せてくれるだろう。

これまでは、帝国と植民地を語る際、「当事者」の語りが参照されることはほとんどなかったと言っていい。奇しくも、引揚げの過程で亡くなり、北朝鮮に埋葬されているままの三万人近くと言われている遺骨の返還をめぐる協議がいまようやく始まろうともしている³⁵⁾。

日本の「戦後」は、300万人もの引揚者を受け入れながら、「元定住者」たちの記憶のみを特権化してきた。そういう意味では、彼らを送り出し、「定住者」のままでいられた「元内地人」たちがあいもかわらず国家の中心に居ながらの再統合化の時代だったとも言えるだろう。そのことが、植民地への移動、数年から数十年に及ぶ「仮定住」の記憶、そして内地への「再移動」の記憶をとどめた自伝や引揚げ文学を「記憶の死」の対象にしてきたのである。

もっとも、いわゆる「満州文学」やその他のアジア関連文学への関心が戦後日本にまったくなかったわけではない³⁶⁾。しかし、それらはしよせんそこにいた元定住者たちの視点から眺められた関心でしかなかったのではないか。たとえば「外地日本語文学」といった視点は、その後再移動できなかった者、「未引揚げ者」たちについての想像——いまだ書かれぬ、あるいは目に触れることのできぬ「未引揚げ文学」の可能性には目を向けぬ。植民地や占領地に残ることを余儀なくされた人々の物語、すなわち「日本人妻」、中国や朝鮮人の間に生まれた混血の子供たち、孤児たち、売られた子供たちの物語などである。それらは、定住者マジョリティ社会の中でマイノリティ化され、いまのところその声が「文学」として聞こえてくることはない。そして、そのように考えたとき、戦後日本文学の中では長らくマイノリティ文学でしかなかった「在日文学」もまた「未引揚げ文学」のひとつであるという、その特質が見えてくるだろう。

なにより「未引揚げ者」の聞こえない物語としてとりあえず耳を澄ますべきは、ついに「移動」できずに亡くなった大人と子供たちの物語であるはずだ。

みんなじっとして動かないで冷たくなっているのです。この土地での働いていた日本人の子どもでした。今はもう何のくるしいこともなく、たのしい安らかな世界にいたのです。もうにげなくてもいいのです。こうして子供たちは満州国のつぐないのために、短い命を失ってしまったのです。この子供たちは、おとなの罪のために、また土へ帰ったのです。いや、日本人の子どもだけではない、たくさん、いろいろな国の子どもたちが、満州の土の上で死んだのです(ともに傍点引用者)。何の理由も意味もなく殺されたのです。(三木卓『滅びた国の旅』、213-214頁)

彼らが戻ってこれなかった理由を単に「戦争」に見いだすことはできない。彼らの死は、直接には命の管理者でもあった男性や大人によるものでもあったのであり、その背後には国家、階級、ジェンダーなど、さまざまな権力と欲望のせめぎあいが存在した。その「声」と、生き残った混血児たちの複数の言葉の聲が聞こえてきたとき、「植民地」と「帝国」、「戦後アジア」「戦後日本」との新たな姿も見えてくるはずだ。

最後に、後藤明生の言葉を引用して終わろうと思う。それは、「移動」から「場」を考える³⁷⁾ ことの意味を痛切に教えてくれる。

日本が植民地政策をとって、満州、朝鮮、台湾、中国の一部でやって来たことはですね、ま、その善し悪しはこの際おくとして、歴史的にそういうことをやったことは動かない。それによって日本自体が変化しなければいけなかったんですね。

ところが、全然、化学的変化を起こしていない。そこにやっぱりぼくは、日本の不思議さがあると思うんですよ。とにかく事実として植民地政策をとっちゃったんだから、国家観念とか、民族意識とかいうものに、化学的変化を起こさせなきゃいけないと思うんですがね。それが物理的に広がっただけで、また物理的に収縮したわけですね。全然、質的に変化していない。実になんの影響も及ぼしてないというところに、ぼくは不思議さを感じたんです³⁸⁾。

注

- 1) この論考は、韓国で発表した「引揚げ文学論序説——戦後文学の忘れもの」（『日本文学』第81輯、2009・11、韓国日本学会）をもとに、早稲田大学国際日本文学・文化研究所・同比較文学研究室主催の講演会と2012年6月の日本比較文学学会大会シンポジウム「比較植民地文学の射程——「引揚者」の文学を開く」での報告を追加する形で補足・修正したものである。なお、個別引揚げ作家に関する論として「小林勝と朝鮮」（『日本文学』2008・11）、「後藤明生『夢かたり』論——内破する帝国主義」（『日本文学』第86輯、2011・2、韓国日本学会）、「後藤明生『夢かたり』——植民地的身体の戦後の日々」（『日本文学』第90輯、2012・2、韓国日本学会）においても本稿における問題意識の一端に触れている。
- 2) 民間人だけで341万人、軍人・軍属311万人であった。このうち朝鮮から70万、満州から123万、満州以外の中国から46万としている（浅野豊美『帝国日本の植民地法制』2008・2、名古屋大学出版会、568頁）。
- 3) 若槻泰雄「図海外引揚者の地域別分布」（『戦後引揚げの記録』時事通信社、1991・10）。また、加藤聖文は引揚者のうち「朝鮮在住日本人85万人のうち65万人」と「満州及び華北からの引揚者130万人」、合わせて200万人が朝鮮・中国からの引揚者としている（『海外引揚げ団体と日本人援護団体——戦後日本における帝国意識の断絶』、小林英夫編『戦後アジアにおける日本人団体——引揚げから企業進出まで』所収、ゆまに書房、2008・3）。
- 4) 成田龍一「引揚げと抑留」（『岩波講座アジア太平洋戦争4』、2006・2、179-208頁）。成田は「引揚げ、および抑留の体験記」が1950年前後、1970年前後、1990年前後に集中して出たと指摘している。
- 5) このことに関して、2012年2月、国際日本文化研究センターにおける講演「引揚げを考える——冷戦と帝国のはざままで」において報告し、注11の論文にまとめている。
- 6) この三つの関係項はいずれもほとんど考えられてこなかったが、なかでも引揚者同士の関係や葛藤は手記や小説に多数書かれながらも注目されたことはなかった。
- 7) 本田靖春「特別企画 インタビューポルターージュ 日本の“カミュ”たち」（『諸君！』1979・7）。五木寛之、日野啓三、尾崎秀雄、池田満寿夫、小田島雄志、山田洋次、大藪春彦、赤塚不二夫、藤田敏八、三木卓、別役実、後藤明生、生島治郎、澤地久枝、山崎正和、天沢退二郎の16人のインタビューをまとめて載せている。
- 8) 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（勁草書房、1971）335頁。
- 9) 尾崎、前掲書328頁。
- 10) 植民地問題に関してもっとも自覚的な作家だった小林勝や村松武司が今ではほとんど忘れさられてしまったのも、その結果と見るべきであろう。

- 11) 拙稿「『引揚げ』と戦後日本の定住者主義」(『日本学報』第93輯, 韓国日本学会, 2012・11) 参照。
- 12) たとえば宮尾登美子は「満州体験を書くために作家になった」(『日本人脈記2 アジアの夢』(朝日新聞社, 2006・10) としているが, 満州体験を書いた小説『朱夏』が書かれたのは, 引揚げから30年以上の歳月を経た時点であった。
- 13) 本稿のもとになった論文を発表したあと, 1970年代に「引揚げ文学」という言葉が存在したことを発見した。そういう意味では新しい命名ではないが, 現代においてはその言葉が存在しないので, 最初の指摘を維持しておく。
- 14) 本田靖春インタビュールポルタージュ「日本の“カミュ”たち——「引揚げ」体験から作家たちは生れた」(『諸君!』1979・7)。
- 15) 前掲「日本の“カミュ”たち」158頁。
- 16) 「引揚者100人の告白」(『潮』142号, 1971・8) 160頁。
- 17) 「内向の世代」とは周知のとおり, 1970年代に入って登場した一群の作家たちを称する概念である。古井由吉, 黒井千次, 阿部昭など, いわゆる「生の不安」を存在論的に扱った作家たちがその範疇の作家として考えられていた。当時彼らを川村二郎が高く評価したのにたいして, 小田切秀雄はおおむね批判的に論じていた(『内向の世代—根拠と打開と—』『早稲田文学』1976・7ほか)。秋山駿は彼らが敗戦時の少年であることに注目して高く評価したが(『新世代の作家たち——内向の世代について』『解釈と鑑賞』1973・5など), この対立的な評価についての再検討も必要となるだろう。
- 18) 前掲「引揚者100人の告白」ほか各種引揚げ手記。
- 19) 前掲「引揚者100人の告白」142頁
- 20) 尾崎, 前掲書323頁。
- 21) 前掲「引揚者100人の告白」183頁。
- 22) 朴裕河, 前掲論文。
- 23) 五木寛之・日野啓三「異邦人感覚と文学」(『文学界』1979年4月号)
- 24) 前掲「日本の“カミュ”たち」204-205頁, 以下の引用は特に言及しない限り同文献からの引用。
- 25) 五木寛之『運命の足音』2003, 幻冬舎, 35頁。
- 26) 前掲「日本の“カミュ”たち」209頁。
- 27) 前掲「引揚者100人の告白」164頁。
- 28) 朴, 前掲論文。
- 29) 朴, 前掲論文。
- 30) 前掲「日本の“カミュ”たち」209頁, 以下特に言及しない限り, 同文献からの引用。
- 31) 以上, 前掲「引揚者100人の告白」138頁。
- 32) 前掲「日本の“カミュ”たち」, 以下同じ。
- 33) 朴, 前掲論文。
- 34) 朴, 前掲論文。
- 35) 『朝日新聞』2012年8月13日。
- 36) たとえば「植民地文化学会」とその機関紙『植民地文化学会』は, そのような動きの数少ない試みといえる。ただし, この学会の掲げる「植民地文化」という言葉のベクトルが, その意図に反して過去の「帝国」の痕跡をたどることになりうる危険性があることに関しては十分な検討が必要だろう。
- 37) 伊豫谷登志翁編『移動から場を問う——現代移民研究の課題』(有信堂高文社, 2007)
- 38) 前掲「日本の“カミュ”たち」225頁。